『ナポリの繋がり社会、−家族、近隣、移民、黄泉の死者と共に生きる−』

**「豊かな」町の定義**

「豊かな」町とは、どのような町でしょうか。イタリアは、先進国の一つとされているものの、南北で大きな経済格差がある国です。北部は、失業率、年間収入、インフラ設備、行政サービス、教育水準、どれも南部を上回っており、住みやすい地域とされています。

経済的にも文化的にも「豊か」であるのは北部イタリアですが、実は、特に北東部において自殺率がイタリアで最も高いというデータがあります。その一方で、島を除く南部は、欧州の中でも、自殺する人が最も少ない地域。特に、ナポリは顕著で、物質的に満たされていなくても、助け合ってそれなりに生きていけるという不思議な町なのです。死ぬほど思いつめる人が少ないというのは、別の見方をすれば、人が不安な気持ちを解放しやすく、精神的にも乗り越えやすい環境であるといえます。

図版１、２

キャプション

図版１： 2018年度の最も住みやすい町上位10位（◎）と最も住みにくい町（●）最下位10位のマッピング。雇用・消費、ビジネス活性度、環境・福祉などの指標を基に作成されている。　(ソレ24オレ紙のランキングから筆者作成)

図版２：イタリア地域別自殺者の推移（1993〜2009年までの人口１０万人当たりの自殺者相対数）（Istat 「I suicide in Italia Anno 2015」より筆者加筆）

**「都市」の中の田舎**

イタリアでは、一定の人口規模や表面積を超えるコムーネ（基礎自治体）は、メトロポリタンと呼ばれています。ナポリは、14のメトロポリタンの一つで、人口密度はイタリアで最も高い町です。

イタリア都市部では、家族や近隣住民との関係が希薄になってきているといわれています。南部、特にナポリでは、地縁、友人関係を大事にする田舎くさい人間関係が営まれ続けています。住んでいる器は「都市」であるのに、農村に住んでいるような人とのつきあい方。ひょっとしたら、人間関係のしくみ自体が、絶望せずに生きていける秘訣なのかもしれません。

写真３、４

キャプション

写真３：多元都市ナポリ、写真４：人口密度が最も高いナポリ

**モノも気持ちもあふれ出す路地**

イタリア南北の自殺のデータの矛盾をきっかけとして、ナポリ流「豊かな暮らし」について観察してみることにしました。2017年からの2年間、ある地区を選び、インタビューやアンケートによって調査し、調査報告書にまとめました。

調査対象は、ナポリの最も庶民的な地区の一つであるサニタ地区。路地に面した家のドアは開けっ放し、人が頻繁に出入りします。路地には私有物があふれ出しています。これは東京下町の路地空間のあふれ出し現象にも似ていますが、少し違います。各何度も通いつめるうちに、路地を中心に目に見えないネットワーク網が浮かびあがってきました。

サニタ地区には、外国人在留者が多く住んでいます。異国の音楽や会話が聞こえ、スパイスの効いた料理の香りが、元々の住民たちの生活音や匂いと混じり合っています。文化的な衝突はなく、いい具合に共存していました。

異なる価値観をもつ人たちが同じ町や地区に住むのは簡単なことではありませんが、異質なものを身体で感じとっても、許容の精神が共通感覚として根本にあるのだと感じました。これは、生まれた時から家族や地域社会の中で習得しているのだと、調査をしてはっきり分かったのです。

写真５、６、７

キャプション

写真５：高層化した住宅がひしめき合うサニタ地区

写真６：路地をサロンのように使うのは当たり前。ソフィア・ローレン主演の『昨日・今日・明日』は、サニタ地区で撮影された。

写真7：喜劇俳優トトの主演するシーンが撮影された路地は、現在でもシェアハウスのリヴィングのように使用されている

**家族の記憶**

サニタ地区の賑やかなメインストリートから少し坂を上がっていったところにある小さなカフェ、バール・トト。急逝した父親の食料品店があった同じ場所に、兄弟3人で経営しています。「勉強をもっと続けたかったけど、働かざるを得なかったから」と2３歳の弟は残念そうな表情を隠しませんでした。「正直いうと、経営は何とか収支を合わせているよ。でも、元同級生がコーヒーを飲みに来てくれるし、父のことを知っていた人たちがコーヒーを注文してくれるから配達にも忙しいよ。」と、語りました。その背後には、父親の大きな遺影が飾られていました。私たちは、インタビュー後に、できる限りの飲食をしてこのバールを出ました。

写真8、9

写真8：バール・トトの３兄弟

写真9：毎日コーヒーを飲みにきてくれる友人とテラスに座る妹。

　もう一人、インタビューをして印象に残った男性がいます。中古家具屋を営む彼は、路地の人気者で世話好きです。男性が首に下げているペンダントの写真の女性2人は誰かと聞くと、「これは僕の母と姉。2人共亡くなってしまったけど、いつも身につけている。」と答えました。そのペンダントそのものよりも、家族への愛を、素直に表現する男性の様子の方に注目して聞いていました。

写真10 男性の住まい方のインタビュー中、目が釘付けになったペンダント

インタビューをした住民の中に、長年病気を患ったため少しネガティブな考え方をする60代の夫婦がいました。最初は私のことを怪訝な顔で窓から眺めていたのですが、何度か路地を通るうちに家の中に招かれました。ご夫婦が住む家は、８畳ほどの大きさのベットルームと、台所兼リヴィングの２部屋だけです。自分の子供たちに、何か財産を残したいと考えた時、両親の記憶が残るこの家を購入するしかないと思ったそうです。イタリアでは、ピアノ・レゴラトーレ・ジェネラーレというマスタープランによって歴史的地区の建物は取り壊しや過度な改修から守られているため、男性の幼少期の記憶のままの路地や住宅が残っていたのは幸いでした。

貧しく苦しい時代の記憶は、この男性にとっては両親との幸せな思い出の場所だったのです。

写真11 現在は改装して綺麗になっているが、ここに両親と家族５人で住んでいた。

------------------------------（分けるならここでしょうか？）

**喜んでもらえることが喜び**

ナポリには「カフェ・ソスペーゾ」という慈善行為があります。これは、経済的に苦しい人にもコーヒーぐらいはバールで飲めるようにと、コーヒーを２杯分支払う古い習慣のことです。苦しい時代は去ったため、現在では滅多にみかけなくなりましたが、ナポリ市民の精神の根本には、「誰1人おいていかない」という道徳的な連帯精神で溢れています。写真12,13

2020年3月の新型コロナ・ウィルスの影響で、真っ先に打撃を受けたのは、サニタ地区のような低所得者層でした。たったの２週間で、買い物にいけなくなる人、1日１食になる人が増え、教会の運営する無償の食事提供の時間には、かつてない数の人が並びはじめました。それから数日もしないうちに、市内のNPO団体、キリスト教団体、ボランティアなどが「スペーゼ・ソスペーゾ」（食料品の寄付行為）を実行して、経済的に困難な家庭に食材を配ったのです。

実は、筆者の私も「スペーゼ・ソスペーゾ」をしました。息子のクラスメートの両親が提案して、同じ学校の経済的に厳しい家庭に食料品が届けられました。

慈善行為、連帯などといった大きなスローガンよりも、ただ単純に困っている相手が喜んでもらえることが、お互いにとって幸せだというだけ。そのためなら少しの時間やお金を犠牲にしても惜しくありません。もっと大きな価値や精神的な充足感を得られるのですから。

写真12

写真12：サニタ地区のメインストリートでコーヒーを飲む住民

写真13,14 写真12、13：「エノテカ・ソスペーゾ」ではないが、観光客だけでなく地区住民も外のテーブル席で飲めるように、価格設定やテーブル席を工夫しているサニタ地区の店主

写真15 受け取る人の尊厳を考慮して、低品質な食材を購入しないように気をつかった「スペーゼ・ソスペーゾ」

**第六感を信じる人たち**

ナポリでは、故人もコミュニティに生き続けます。ナポリ旧市街を歩いたことがある人なら、いたるところに小さな祠があるのに気がついた人もいると思います。その祠に設置されたマリア像や聖人の足元に、亡くなった住民の顔写真が何枚も貼りつけられています。夕方になると、暖色系の灯りに照らされた故人たちの顔写真が路地に浮かび上がるのです。

祠を管理するのは、隣か正面に住む地上階の住人。定期的に祠の掃除をしたり、照明用の電球を替えたりします。電気代は誰が負担するかなど、細かい規則は特に必要ありません。

残された家族は、祠の前で近所の人たちと立ち話をして、家族を失った悲しみや苦しみを吐きだす。私的で内的な感情を屋外で表現し、黄泉の国の故人を悼む様子を目の当たりにしました。ナポリは近代的な合理主義や発展の法則では説明のできない町、別の価値観からくる身体的体験を重視する町なのだと、再確認したのです。

写真16,17　写真16：夕方になり、電気が灯る路地に設置された祠

　 写真17：お金がなくても、小さな壁の穴でも祠に変身

現代の私たちは、いつの間にか他者のために時間や気持ちを割くことができなくなってしまいました。都市化や工業発展と引き替えに失ったものの代償は大きいのかもしれません。

そして今年に入って、グローバル化によって広がったパンデミック。多くの犠牲者を出したイタリアでは、愛する家族を失った人、経済的に突然困窮する人、社会的排除を受ける人たちが爆発的に増加していくなか、これまでの都市のあり方や価値観が一気に覆されました。人とは物理的な距離を置かねばならなくなり、その一方で精神的な繋がりはどのように保っていったらよいのか。サニタ地の人たちの住まい方は、私たちに何か示唆を与えてくれそうです。可能なかぎり、これからもこの地区の人たちの生き方を追っていきたいと思っています。

写真18

 写真18 :ナポリのビュースポットでナポリ湾を撮影する「家族」と日本語で刺青を入れた若者